

国語科学習指導案

令和3年1月21日（木）第3校時 第3学年3組（3年3組教室） 指導者 桐生 直也

【単元】短くまとめて伝えよう（『ありの行列』光村図書3年下）

考察	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
育成を目指す資質能力	考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係についての理解（(2)ア）	- 目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約する力（C(1)ウ） - 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつ力（C(1)オ）	言葉がもつよさに気付くとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にしたい、思いや考えを伝え合おうとする態度
児童の実態	- 説明的な文章の問いと答えの関係や、答えの段落の要点と説明の関係等について理解している。 - 文章を読む目的によって、必要な情報が異なることに対する理解が不十分である。	「中」の複数の段落が並列的に並べられた文章から中心となる語や文を抜き出すことができるが、「中」の複数の段落が順序立てて並べられた文章を、目的に応じて要約することに難しさがある。 - 文章を読んで感想をもつことはできるが、一度もった感想や考えを更新し続けることに弱さがある。	- 本を読んで分からないことについて、別の本を読んで知ろうとすることができる。 - 読書をした際、読んだ内容を短くまとめて伝えるという経験が乏しく、短くまとめるよさを実感していないため、短くまとめて伝えることに対する必要感が低い。
価値	「ありの能力」「ウイルソンの研究」といった、異なる視点で要約の目的を設定できるため、目的に応じて中心となる情報が変わることについての理解を深めることができる。	「ありの能力」「ウイルソンの研究」といった、伝える目的に応じて文章を要約する活動は、自分の目的に応じた中心となる語や文を見付けて要約する力を高めることができる。 - 文章を要約する活動は、文章を繰り返し読んで理解したことを基に考えたことを更新し続けるため、感想や考えをもつ力を高めることができる。	『ありの行列』に加え、小学校3・4年生の実態に応じた複数の説明的な文章を用意することは、多種多様な子どもたちの興味・関心に対応し、一人一人の、楽しんで読書しようとする態度を養うことができる。 - 複数の説明的な文章を読む活動は、子どもたちの、「内容を簡単に知りたい」という思いを高め、短くまとめることに対する必要感を高めることができる。
見方・考え方	伝える内容と、伝えるために必要な中心となる語や文との関係を、語や文の意味、役割、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、要約すること。		
今後の学習	4年「中心となる語や文を見つけて要約し、調べたことを書こう（『世界にはこる和紙』『百科事典での調べ方』『伝統工芸でのよさを伝えよう』光村図書4年下）」において、リーフレットに掲載するために要約し、書き表し方を工夫する学習へと発展していく。		

指導と評価の計画

目標	伝えたい内容に応じて文章の中心となる語や文を落とさずに要約することができる。			
読活動	説明的な文章の内容を、伝えたいことに応じて要約し、紹介する活動。			
評価 規準	(①知・技) 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解している。(②) ア) (②思・判・表) 「読むこと」において、目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約している。(C (I) ウ) 「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。(C (I) オ) (③主体的態度) 進んで中心となる語や文を意識しながら説明的な文章を要約し、学習課題に沿って、要約した文を伝えている。			
過程	時間	学習活動	指導上の留意点	評価項目＜評価方法（観点）＞※太字は「記録に残す評価」
つかむ	1	○『ありの行列』を読み、学習課題を設定し、学習計画を立てる。 学習課題例：伝えたい内容を簡単に紹介できるように、文章を短くまとめられるようになろう	○『ありの行列』を、目的に応じて要約することに対する課題意識をもてるよう、初読の感想を内容ごとに類型化して板書する。	◇目的に応じて文章を要約することに関心をもち、中心となる語や文を見付けることに関わった課題意識について発言したり記述したりしている。 ＜発言・振り返りシート③＞
ふかめる	3	○『ありの行列』を要約することと、要約した文章を修正することを繰り返す。 （本時2／3）	○伝える目的に応じて、要約の中心となる語や文が異なることについての理解を深められるよう、伝えたいことごとに色分けした要約文カードに残された語や文を比較する機会を設定する。	◇要約の中心となる語や文は、伝える目的に応じて異なることについて記述している。 ＜振り返りシート①＞
	2	○複数の説明的な文章の中から一つを選択し、紹介するための要約文を作る。	○既習事項を生かして新しい文章を要約できるよう、『ありの行列』を要約した際に学んだ要約のポイントをまとめた資料を掲示する。	◇目的に合わせて、中心となる語や文を指摘しながら、複数の説明的な文章の中から選んだ文章の本文カードを短く削っている。 ＜要約文②＞
ふりかえる	1	○文章を要約する際に気を付けたことについてまとめ、単元の学習の振り返りをする。	○文章を要約することについて考えたことに対する達成感を得られるよう、これまでの単元の学習で蓄積した振り返りシートの記述を読み返す機会を設定する。	◇学習課題の解決状況に関わって、中心となる語や文に着目して説明的な文章を読んだことに触れながら、今後に生かせそうなことを記述している。 ＜振り返りシート③＞

本時の学習（3／7時間目）

ね ら い 『ありの行列』の要約文を読み合うことと修正することを繰り返すことを通して、目的に適した語や文を選択しながら要約文を作成することができる。

評価項目 要約の中心となる語や文は、伝える目的に応じて異なることについて記述している。

<振り返りシート①>

学習活動と児童の意識	指導上の留意点
1 本時のめあてをつかむ。 ・僕の目的は「ありの能力」を伝えることだよ。大事なことを落とさないように、できるだけ短くまとめたいな。（課題意識） めあて：落としてはいけない言葉を見付けて、伝えたいことが伝わるように『ありの行列』を短くまとめよう	○目的に適した語や文を残すことに対する課題意識をもてるよう、ペアの友達と前時の振り返りを読み合い、互いに目的を伝え合うよう促す。
2 『ありの行列』の要約文を読み合うことと修正することを繰り返す。 ・ウイルソンのことを残している友達もいるけれど、「ありの能力」を伝えるのだから、問いの文やウイルソンの話はなくてもいいよね。ありについて書かれている部分だけを残そう。 ・石を置いてじゃましても行列が復活するのってすごいよね。これもありの能力として残しておこう。 ・実験の部分がなくて、何でこの結論になったかが分からないし、実験の部分は残した方がいいよね。 ・友達は実験の話を残していないな。実験の話まで残すと、長くなり過ぎてしまうな。確かに友達が言うように、ありの能力を伝えることが目的なら、実験の話よりも、実験の結果から分かったことを残した方がいいのではないかな。 ・「ありの能力」を伝えるためには、実験の結果から分かったことを中心にまとめるといいのだな。目的が違えば、僕が残さなかった部分を残すこともあるのかもしれないな。（課題を解決した意識） 3 本時の学習の振り返りをする。 ・他の目的の友達はどんな要約になっているのかな。読んで比べたり、友達の話を聞いたりしてみたいな。	○要約文に必要な文に対する考えの違いに気付けるよう、ロイロノート上に『ありの行列』の全文を載せたカードを用意し、短く削ったものを、アプリケーション内の提出箱に提出するよう促す。 ○要約文を修正したり元に戻したりしながら自分にとって大事な部分を選ぶことができるよう、『ありの行列』の全文を載せたカードをロイロノート上に複数用意し、「コピーして使用すること」「何度もやり直してよいこと」を伝える。 ○同じ要約の目的をもつ児童同士が、互いの要約文を比較できるよう、目的ごとに色分けされた要約文カードから同じ色のカードを選択し、共通点や相違点を探すよう促す。 ○課題意識を起点に考えを聴き合い、要約のポイントに対する考えを深めることができるよう、机間巡視中に見取った、児童が話題にしている共通点や相違点の中から、文章の中心となる語や文に関わるものを取り上げて学級全体に問いかける。 ○目的に応じて文章を要約することへの多様な考えを基に、自分なりの考えをまとめられるよう、異なる考えをもつ児童を意図的に指名する。 ○学習の達成感や課題を実感し、次時の学習への見通しをもてるよう、要約するとき気を付けることについて、「できたこと／できなかったこと」「できた／できなかったと考える理由」「次にはがんばりたいこと」を視点として示し、振り返りシートに記述するよう促す。

授業の振り返り	※授業の様子は、本校HPでも紹介しています。 【教育研究→令和2年度提案・部内授業の様子】
機器	タブレット（1人1台）、大型モニター
使用アプリ	ロイロノート
機能等	本文カード（操作、可視化）提出箱（可視化、共有）

○実際の授業の流れと児童の様子

【導入】 児童はこれまでに、要約の目的として、「ありの能力を伝えること」「ウイルソンの研究を伝えること」を設定し、要約を始めている。授業の冒頭で、児童は同じ目的を選択したペアの児童と前時の振り返りを共有し、本時の学習に対する課題意識を伝え合い、めあてを立てた。

【展開】 本文を音読した後、各自のロイロノート上に用意された、要約の目的ごとに色分けされた本文カードを用い、要約を始めた。要約の際は、本文を削ることになるため、あらかじめ本文カードは複製してある。児童は、本文カードの文章を音読し、残した方がよい言葉か、削った方がよい言葉かを検討しながら本文を短く削った。



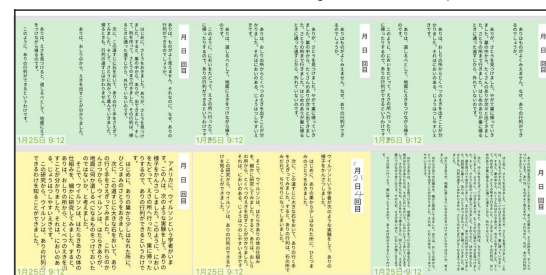
＜本文カードを要約する児童の様子＞

「ありの能力」を伝えることを目的とした要約に取り組んでいる児童の多くは、「ウイルソンのことについて話している部分は要らないよね」と考え、「あり」や「とくべつなえき」といった言葉を大事な部分とし、それらの言葉が含まれない部分を中心に文章を削った。削ることと音読することを繰り返しているうちに、「ウイルソンのことについて書いてある部分でも、削りすぎるとつながらなくなってしまう」と、短くしすぎることの弊害についても言及する姿が見られるようになった。「ウイルソンの研究」を伝えることを目的とした要約に取り組んでいる児童の多くは、「ウイルソン」という言葉や、「ウイルソンがしたこと」について書かれた部分を大事な部分と考え、それらの言葉が含まれない部分を中心に文章を削った。こちらも、削っていくうちに、「ウイルソンの研究について伝えるのならば、ありのことも残す必要があるよ」と、残した方がよい言葉について検討しながら活動に取り組む姿が見られた。

これは、コピーした本文カードを用いて自分の要約の過程を可視化したことにより、要約前と後の文章を比較しながら違いを確かめやすい環境が生まれ、残した方がよい言葉と削ってもよい言葉について検討しやすかったため、目的に応じた要約の仕方を見いだすことができたのだと考えられる。

目標の文字数まで本文を削った児童は、ロイロノートの提出箱に要約した本文カードを提出し、同じように友達が提出したカードを参照し、自分の要約文と比較した。

その後、『はじめ』と『おわり』は要らないと思っていたけれど、残している人もいるね。」



＜提出箱内の色分けした本文カード＞

「問いは残した方がいいと思うんだけどな」などと、ペアの児童と一緒に、他グループの児童の要約文を読みながら、残した方がよい部分と削った方がよい部分についての考えを聴き合い、再び自分の要約文の検討を続けた。

これは、提出箱を用いて自他の要約文を可視化・共有化したことで、自分とは違う考えを受け取りやすい環境が生まれ、自他の考えを比較しながら残した方がよい言葉や削ってもよい言葉についての考えを更新しやすかったため、目的に応じた要約の仕方についての考えを新たにすることができたのだと考えられる。

一方で、残した方がよい言葉や削ってもよい言葉についての発話が少なく、要約が思うように進まない児童の姿も見られた。これは、元々の文章の量が多く、全体を俯瞰しながら部分を削っていくことに難しさがあったことや、共有した情報の量が多かったことにより、自分たちの状況に応じた情報を選ぶことができなかったことが原因として考えられる。

【終末】 児童は要約した際に分かったことや悩んだことについて振り返りカードに記述し、本時の活動を振り返った。

○授業改善に向けて

- ・文章の要約において本文の全体を俯瞰することは重要であるが、活動の際には、要約する情報を、段落のまとまりなどに、発達段階に応じて絞ることが必要である。
- ・友達の考えを共有する際は、共有の視点を定めたり、共有する情報を限定したりすると、比較しやすい。